基調講演報告

講演会まとめ
講演会では「人と本を繋げる」ことを中心に岩瀬先生の生い立ちから教師時代の経験、風越学園の図書館を作るまでの経緯をお話いただきました。途中参加者同士の相談時間があり、聞くだけの講演会でないスタイルが好評でした。軽井沢風越学園の取組みを知ることで、可能性やアイデアなど、参加者それぞれに新たな刺激や発見があったと思います。「風越だからできる」と思わせない、多くの人にそれぞれの可能性を抱かせた講演でした。

講演内容抜粋
まず岩瀬先生から今日一緒に考えたい問いが参加者に投げられました。
公共図書館・学校図書館がより楽しみを創り出すためになにができるのか？
学校図書館が学校教育を変えていくためには何が必要なのか
→学校図書館は、学校教育を変えていける力があると思っている

「一斉講義という伝統的な研修を行った場合、半年後に・・・」
１　あらすじを思い出せる人　　２％
２　キーワードだけなら思い出せる人　29％
※　70分話しても殆どの人があったことしか覚えていない
※　聞いたら対話してみることで覚える
→「小さく対話しながらお話して未来を考えていく」

１　本と図書館とわたし
裕福ではなかったが毎月のように新しい本に触れることができた。
母親も良く読んでいた。それに影響されたのかも。
父は大学の研究者。本をたくさん積みあげてあった。

「あなたが子どもの頃に好きだった本　影響を受けた本はなんですか？」
「思い出すエピソードはありますか？」

→高校時代
家に帰るのが憂鬱で、図書館が第3の場所だった。

→公立小学校教員時代
学校図書館にとって多くの子にとって最初に本に出合う入口である。深く出会っていく最初の場所。そこで豊かな経験ができればその後の人生で困った時などに図書館に足が向くのでは。
学校図書館は重要である。教員になった時は、図書館にほとんど本がない学校でスタートした。初任の4月から毎月1冊ずつ本を買って（古本）教室の片隅に図書コーナーを作った。近くに本があると子どもは自然に読み始めることがわかった。
→身近に本があるとほんと子どもの関係が変わると実感。

複本を置いてみる⇒友達と一緒に読むということが起きた。

国語の時間でも毎日読んでいた。
スタートの10分・教室の中など、読む場所はどこでもいいとした。
→公立の学校でも本がそばにあれば読むんだなと実感した。

ここまで聞いて、どんなことを考えたり感じたりしたか？

→大学教員時代（3年間）
先生になる人こそ本の楽しさを知ってもらいたいと思い、先生になる前に50冊は読もう、と生徒に指導した。（この子にはこの本を読んでほしい、となるため）

良い読書経験があれば子供と本とつなげることができる。

２　学校と図書館～風越の挑戦～

軽井沢風越学園・・・3才から15歳までが一緒の校舎で過ごしている。

・ライブラリーを真ん中にした理由
「本物に囲まれていることが大事」
子ども供ひとりひとりが主人公であり、学び、刺激がすぐそこにある空間にしようと思った。
刺激をもらって働きかける。森、自然、本、道具に囲まれた学校。
現体験、実践から「本」であると思いついた。
デューイの実験学校で図書室が真ん中にある例を知った。

学校建築は子どもに対するメッセージだと思う。
区切られた空間の中で子どもの動きを制御するのは、「先生が主導する」というメッセージではないか。

「本物に囲まれている、本がすぐそばにある空間」
自然、本、道具　手を伸ばして生まれることを大切にしていこう。

これから図書館は難しい時代に入っていく。
一気に来た電子化とどう付き合っていくか。
どう付き合っていくかの問いを立てるのではなく、あらためて「物理的なものの価値」と体がどう繋がっていくかというところに図書館の価値があるのではないか。体を介した質感を伴うやりとりに自信を持ちたい。

特に学校図書館は人生で初めて出会う図書館である。
子ども自身が居場所とか居心地を「選べる」貴重な経験それができるのが図書館。
・近くで読む経験
・ちょっと近くで他者を感じながら読む経験　→　大事
・人が読んでいると読みたくなる。時には一人で読む、それも選べる。
現在は国語と読書がわかれて存在しているが、国語の授業の中でこそ読書が大事であると思う。

「探究と本について」
長野県の第4次長野県教育振興基本計画の中で探究・探究県について謳われている。
「探究県」を支えるセンター的役割が「図書館」

「風越だからできるんだよね」と良く言われるが、本当にそうだろうか？

３　学校と図書館と本と人

松岡享子さんの言葉・・・一番肝要なのは「子どもと本を結ぶ人」
「空間、蔵書、大人」

・間接的に結ぶ人
　としょかんだよりなど

・直接的に結ぶ人
　読み聞かせ、貸出、レファレンスなど　⇒　拡張できないかと考える

・一人一人を知る・コミュニケーションをとる
・先生としてその子を理解する
　→こういう本との出会いがいいのではないか、と思えるように。
　→血液のように学校を循環している　⇒　拡張していけると良い。
・探究の伴走　歩き回って出会ったところでレファレンスできる
・授業に顔を出す
　→先生たちは授業の事で困っているし相談したい。司書が授業内容を知っていると相談しやすい。出かけて行って先生とつながることで、先生とライブラリを繋げる。
・カウンターを飛び出して血液のように流れて繋がっていく
・関心をもって見に行く
・待っているよりノックする

　日常の授業を見る事でコミュニケーションが生まれ、学校図書館と教室がつながっていくことがあるのではないか。
　教員側も、司書に興味を持つことでつながりが生まれることもあるのではないか。

・カウンターを出てチャレンジ
　→子どもと本、先生と本を繋げていく⇒一人一人の教員が本を手渡していく環境になるのでは

※　ライブラリがコミュニティになっていく

　今は滞在型の図書館が増えていて居心地がいいものではあるが、人とのコミュニケーションが全くない。
→これからの図書館は「滞在型」でいいのか考える
　人がつながっていかない、もっと人と本を積極的につなげていく人が館内に動いていていいのではないか。読むことを介してコミュニティができていくことが大事。人と本を介在するライブラリアンが大事ではないか。

※　風越でなくともやれることはたくさんあるはず

もし公立図書館にいたら、学校の先生だったら・・・
・職員室に司書の席をつくる
・常時開いてみる
・司書教諭を専任にする
・司書に授業を見てもらう
・学校中に本を分散配置してみる　など

司書と学校司書　探究が真ん中に来ているからこそ変わっていくチャンスではないか。
一緒に何ができそうか？
・子どもの原体験を育んでいくことにチャレンジしていきたいと思う。
・学校図書館から図書館をとらえ直していくことができるはず。
・ネットに囲まれていることを前提として、その中で原体験を大切にしていく。
司書教諭育成、予算をかけることが必要。人の重要性は気付きにくい。改めてどうあればいいか考えたらどうか。

【問いかけ】
図書館が学校教育を変えていくにはなにが必要か？

最後に
（松岡享子さんの言葉）
わたしたちは、本は良いものであると信じる人びとの集団に属しています。わたしたちの任務は、できるだけ多くの人をこの集団に招き入れる事です、どうかしっかり働いてください。

刺さる言葉だと思う。
できることまだまだあるはずです。考えて楽しい図書館を作っていきましょう。

【参加者からの感想】
松本会場
1　風越だからできるんだよね、という、どうしてもそういう思いにとらわれている。これをどうやったら乗り越えていけるかということを質問しようと思っていたが、講演を通してその答えが話の中にあった。図書館に対する思いの中にあるとあらためて感じた。

2　心を動かされました。「本の質感」を、自信を持って分かち合っていきたい。おそらく皆さんがやる気を貰える講演だったと思う。

3　本当に貴重なお話ありがとうございました。自分のいるところでできる範囲をやってみたいと思った。カウンターを飛び出してといっても、会話が苦手な司書もいると思うので、飛び出すのは…。意見を求められると授業の全体像もわからないので難しいと感じた。

長野会場
1　興味深く拝聴した。子ども達がどんな学習をしているのか、司書室を飛び出したい気持ちもあるが、選書や配架に追われていて顔を出す余裕がないのがつらいところ。自分はひとりで全て行っているが、風越では何人くらいで選書などを行っているのか。

回答
選書は風越の司書が中心になっているが、スタッフからもリクエストがあり、随時購入。また、プロジェクトに合わせて選書を行っている。

アンケート結果では下記のような声が寄せられました（一部抜粋）

・とても話し方が上手で内容もわかりやすく最後までしっかり聞くことができました。子ども達に本に親しんでもらえるようにまず私が親しみたいと思いました。
・学校図書館の理想だと思いました。
・子どもたちが活き活きとしている様子が伝わりました。よく講演会などで事例発表を聞くと、うちじゃできないなと思いますが、本当にそうなのか改めて考えたいと思います。
・一度見学に行かせていただきたいと思いました。
・学校のまん中にある図書館、子どもたちが自由に読み、自主的に調べている姿に感動しました。まず身体での経験が大事だと思いました。
・自分にできることがなにもないような気持ちでいましたが、今まで学んできたことが、確かなことであると実感できたご講演で元気が出ました。これから自分にできることを探そうという気になりました。
・風越学園だから特別なわけではなく、「人」それぞれに考えて努力していけばできることを心にとめおきたいと思いました。
・身体性と質感を大事にしたコミュニティライブラリー。自信を持って歩み、つながっていきたいと思えました。エールをいただいた想いです。
・教員時代の実践、ご自身の幼少時代の本との出会いの体験などから、具体的な実感を持った取り組みが印象的でした。実体験が大事とのことですが、学校の授業では、現在ひとり読みの指導になっています。
・学校図書館で大事に考えたいことを示唆いただけた。家庭で学校で、読書環境をどのように整えていくか、そのことが子どもの読書への興味関心につながることがよくわかりました。

※アンケート回答期間　10.28（土）～11.15（水）
※回答者数　137名（松本市音楽文化ホール79名　県立長野図書館58名）